研修所トピックス＜2＞

心を揺する鬼太鼓

研修所の修了生に会いたければ岩首の祭りに行けばよい！今年は宵宮の為に、盛岡市の黒川さんさ踊り保存会の方々も来島され、いつもの年より懐かしい顔がたくさん集まりました。研修生がふるさと、と感じる柿野浦や岩首の鬼太鼓。今回はお付き合いの古い岩首の皆さんのご紹介をします。

岩首鬼太鼓の方々から研修生が鬼太鼓を教わるようになったのは、一九九五年からである。それまでは、前身の鬼太鼓座当時にご縁あって数人の方に教えに来ていただいたことがあったり、何といっても岩首出身のスタッフ、津久美のご実家に呼ばれて皆でご馳走になり、観客としての祭りの楽しさを毎年味わわせてもらっていた。研修所が岩首地区に移ったのを機に、生活の中に息づいている芸能、その地域で大切に伝えられているものを全身で体感したくて、それ以来、毎年の祭りの稽古に参加させていただいている。

師匠たちは、地元の若者に対するのと何ら変わらず、熱心に鬼を通していろいろなことを伝えてくれ、踊りを教わるだけだと思っていた私達の心を大きく揺さぶってくれるのだった。今年も祭りの日には、十三晩、親身に教えてくださった気持ちに答えるだけの思いで、ただ必死に鬼を打つ一年生の顔があった。しかし、皆さんの親心で何度も打たせてもらっているうちに、緊張していた気持ちと身体はほどけ始め、いつのまにか、ここにいるのにいないような、全身がしびれるような、喜びに包まれている。

あったかいわくび

文：一九九六年度研修生　座間佳子

「頑張れ！おめえが倒れたら祭りは続けられんようなるんだからな」

祭りの日、面をつけた鬼打ちの息が上がり、面の下からこもった荒い息の音がきこえる。肩に担いだ鬼の腕が前にも増してずっしり重く感じる。踊り続け、足がけいれんさえしている。そんな若い鬼打ちを岩首の人たちは熱くて強いまなざしで励ましにくる。鬼打ちは主役なのだ。

子供たちは踊り終えた鬼の腕をとり、うちわで扇ぎ、とにかく鬼のそばに居たがった。小さい頃から鬼打ちに憧れている。今年の祭りで面をつけた若者も小さい頃からそういった子供だったそうだ。昔の写真を見せてもらうと、見覚えのある五、六歳の男の子が鬼にぴったり寄り添ってうれしそうにしている。

子供たちは踊れる年齢になるとまずは老僧を踊り、自分をアピールすることから始まる。それが年長者の目に留まれば鬼になれるという訳だ。そうやって鬼になれた者は「他の者に鬼を打たせたくない。それじゃあ納得できない」という強い強い思いがある。踊って踊って踊って踊り尽くして、見守ってくれていた者たちにかえられて踊り終える鬼打ちは名誉ある英雄なのだ。

やはり岩首にも島を離れていく若者がいる。だが祭りが近くなると、耳元でドコドンチンドン、ドコドンチンドン…と太鼓が鳴る。どんなに離れたところに住んでいようとも太鼓は鳴る。そして祭りの日、みんな岩首へ帰って来る。都会へ行った者が、少々かっこつけて古里に戻ってくる。そうやって都会へ出て行った者でもまた、若衆として祭りに参加できる。やりたい者が参加する。そしてよそ者の私たちも…。それが岩首の祭りの魅力だ。そんなあったかい祭りが、あったかい岩首の人たちを作りあげているのかもしれない。

神社でのお籠もり。お酒に酔いつぶれ、獅子の布やハッピを布団がわりにみんなバタバタと寝てしまう。それを見て年長者は「これでいいんだ」と言う。「寝てしまっていても、みんなが居れば淋しくないからね」と微笑む。「祭りは楽しくなけりゃいけないよ」とお籠もりの一時間おきに打つ太鼓を打ちに行った。本当にうれしそうに三時の太鼓を打ちに行った。

岩首の祭りが好きなのだ。

（一九九六年度研修生調査ノート「岩首鬼太鼓の世界」より）